

先日、横山駿也『明治人の作法－躰（しつ）けと嗜（たしな）みの教科書－』（文春新書）を読みました。著者の横山氏は小学校の元教員です。この本に書かれている「御分」という言葉が印象に残りました。横山氏によると、我が国の武士は、「自分」と同じように他人にも「分（立場や役割）」があることを意識して、これを「御分」と呼び「自分」と同様に尊重していたそうです。また、武士の作法とは、お互いの「分」を立てて尊重し合うことで成り立っていると説かれています。

我が国では、昨今、行儀や作法を軽視するような傾向が見られます。そのためか、残念ながら傍若無人な振る舞いをする人やクレーマーも増えています。それは、「自分」だけを過度に立て、「御分」を全く立てようとしていないからではないでしょうか。欧米人は、唯一絶対なる神を意識することで、個人の自由や欲望を制限しようとします。しかし、我が国には、欧米のような唯一絶対な存在はありません。そのため、かつての武士のように、お互いの「分」を尊重し合うことが、人間関係の調和に繋がるように思います。